

寺

画数 6
 筆順 + 土 寺 寺
 オン シ
 フン てら

成り立ち



↓ 止 ↓ 寺 ↓ 寺 ↓ 寺

「足のうら」のかたちをあらわし、「止まる」という
 いみの「止(碑146)」と、「手のみやくどころ」をあら
 わし、「きじゆん」のいみにつかわれる「寸」とをくみ
 あわせてつくった字です。

「きじゆん」の「とどまる」ところ「くにおや
 くしよ」をあらわした字です。

いまは「おてら」のいみにつかわれていますが、ぶつ
 きようがはじめて中国につたわったとき、「白馬寺」と
 いう「やくしよ」が「僧(ぼうさん)」のやどにあてら
 れたため、「僧」のすむいえを「寺」というようになり
 ました。

使い方

▽お寺は仏をおまつりし、坊さんが仏教のぎょうじをす
 るところです。日本には、法隆寺や東大寺など、ふる
 くてりっぱな寺院がたくさんあります。

熟語例

- ▽寺院(院は「りっぱなたてもの」のこと。お寺のたて
 もののことをいいます。)
- ▽神社(社は神をまつるところ。仏をまつるお寺や神を
 まつるお社、ということ。お寺やお社)
- ▽寺塔(お寺の塔。五重の塔などのこと。また「お寺と
 塔」ということ。)
- ▽寺門(お寺の門。「山門」ともいいます。)
- ▽山寺(「山寺」ともいいます。むかしは、人ざとはな
 れた山の中にたてられました。山の中のお寺。)
- ▽国分寺(ならじだいに、聖武天皇が人びとのしあわせ
 をいのつて国々にたてたおてらのこと。東京の国分
 寺市は、むかし国分寺がたてられたところです。)
- ▽寺子屋(えどじだいに、お寺で坊さんが子どもたちによ
 み・かき・そろばんをおしえました。それで、子ども
 によるみ・かきをおしえるいえを寺子屋といいました。)

自

画数 6
 筆順 一 白 自
 オン シ・シ
 フン みずかひら

成り立ち



↓ 自 ↓ 自 ↓ 自 ↓ 自

人の「はな」のかたちをあらわした字で、もとは「は
 な」ということばをあらわした字でした。

「じぶん」のことをさすばあい、たいいてい人は「じぶん
 の「はな」をゆびさします。それで、この「自」を「じ
 ぶん」といういみにつかうようになりました。

「自己を表す字に「私」がある。この「ム」も鼻の形
 を表した字で、音は「自」と同じ「シ」である。自己の
 ことを「自分」というが、実は、これは「自己の「分け
 前」といういみの言葉である。「私」も、「ムの稲」と
 いういみの字で、取れた稲は「税」と「私」とに分けら
 れる。その「私」が「自分(自己の分け前)」なのであ
 る。④「他」「公」

使い方

- ▽きようは、先生がお休みなので、自習しました。
- ▽おかあさんは、「自分のことは、自分でしなさい」とい
 います。だからぼくは、自分のことは、ちゃんと自分
 できるように、どりよくしています。
- ▽「天は自らたすくものをたすく」ということばがあ
 ります。「かみさまは、自分でどりよくする人を、おた
 すけになる」といういみです。これは、ゆうめいな福
 沢論吉という人のことばです。

熟語例

- ▽自動車(自分の力で動く車、といういみで、つけられ
 たなまえです。四つの車輪をもち、おもにガソリンで
 はしる車のことです。)
- ▽自習(自分で学習すること。先生がいないうちに、自
 分たちだけでべんきようすること。)
- ▽自業自得(自分でしたことのみくいを、自分でうける
 こと。おもにわるいことについて、つかえます。「あんな
 びようきになったのも、自業自得だから、しかたが
 ない」などといいます。)